

## 【姫路市立青山幼稚園】の取組

### 1 テーマ

多様な体験を通して、人と関わる力を育む

～豊かな自己表現で、自分の思いも友達の思いも

大切にし合える関係を育む教師の援助～

### 2 テーマ設定の理由

幼稚園教育において育みたい資質・能力として、「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」があげられている。

幼児個々の資質・能力を育むために、幼児の興味・関心を十分に把握し、幼児が主体的に「ひと・もの・こと」に関わる環境を整えることが大切であると考え。その中でも、人と関わる力を育むことを重視したい。

本園の幼児は、家庭で大切にされ温かく見守られながら成長しているため、自分の好きなもの、やりたいことに興味・関心を持ち、自ら関わり取り組もうとする姿が見られる。一方、家庭では自己主張をしなくても、家族が自分の思いに気付くことも多いため、園では自分の思いを伝えようとする姿があまり見られず、思いが伝わらないもどかしさを感じている。また、少人数の学級のため友達と異なる思いを出し合ったり、切磋琢磨したりする機会が少ない。

多様な体験を通して、幼児の心が動き、湧き出た自然な思いが豊かな自己表現（目線、表情、身振り、言葉）につながるのではないかと考えた。幼児が人との関わりの中で自分の思いを伝え、友達の思いも受け入れられるために、人との関わりにつながる教師の援助と環境構成について研究を進めることにし、テーマを設定した。

### 3 研究経過

#### (1) 1年次(令和5年度)の取組

①研究テーマの共通理解と研究内容や方法を検討

実践の方向性としてのサブテーマを設定

②公開保育と指導助言（神戸常盤大学 多田琴子客員教授を招聘）

③「人と関わる力の育ち」について多様な体験の実践事例から考察

(ア)関わりを通して育つ姿

4歳児 友達と出会い“同じ”が楽しい(※1)

5月 一人遊びから、友達と一緒に楽しいと思えるようになってきた。その中で、友達とのトラブルや思いのすれ違いを経て、教師の仲立ちにより、相手の気持ちや思いに気付こうとするようにもなった。

5歳児への憧れと仲間との団結(※2)

11月頃 5歳児と一緒に遊びたい気持ちが強くなり、サッカーをするときに

は、4歳児から声を掛け、異年齢で作戦を考え伝えながら、遊ぶ姿も見られるようになった。4歳児にも仲間意識が芽生えてきた。

- 5歳児 4歳児との関わり 思いから思いやりへの変化(※3)
- 4月 5歳児になった自覚から4歳児に積極的に関わろうとするが、5歳児のやってあげたい思いと4歳児のやりたい思いのすれ違いがあった。
- 10月 様々な遊びや行事での関わりを通して、徐々にお兄さんお姉さんらしくなり、すれ違いや戸惑いが4歳児と関わる喜びや楽しさに変わっていった。
- 1月 泣いている4歳児を見てその子の思いを聞き、解決してあげようとする姿が見られた。関わる喜びが相手を思う優しさや思いやりが変わっていった。

#### (イ)多様な体験を通しての育ち

4歳児は初めての集団生活を経験するため、友達とのままごと遊び、自然との関わり、小学生や地域の方との交流活動、様々な自己表現の場の体験を通して自分らしさを発揮していくようになった。

5歳児は仲間と没頭して遊び込む、試行しつつ認め合う、目標をもって取り組む等の体験を通して、自発・自主・主体の変容が個や集団に見られるようになった。教師は4歳児には自分らしさを発揮し、認め合える環境構成を、5歳児には幼児の意欲を掻き立てる環境構成を考え、整えていく大切さを実感した。

#### ④幼児が身に付けた力や育ちの過程をドキュメンテーションにより明確化

## (2)1年次の成果と課題

### ①成果

- ・園内外での多様な体験や様々な人々との関わりを通して、幼児が自発的に遊びや学級活動に取り組む姿が見られるようになった。
- ・テーマについての実践を重ねることにより、個々の幼児の興味・関心の対象を明確に捉えたり、幼児の姿の変化を客観的に認識したりすることができた。

### ②課題

- ・1年次の学級活動では、少人数なりに学級活動が行えていたが、遊びの広がりや発展に課題が残っている。また、それぞれの年齢に応じた環境構成の大切さを実感した。さらに適切な環境構成を整えていきたい。
- ・2年次はさらに学級の構成人数が減るため、4歳児5歳児の担任教師が連携し、合同保育を行うことで遊びの広がりや発展を促し、幼児同士の関わりが深まる環境構成と援助を行う。

### (3) 2年次(令和6年度)の取組

#### ① 異年齢児との合同保育の中で幼児の自己表現の変化を把握

1年次の指導計画では、歳児ごとの指導計画の中に合同保育に関する内容を入れていた。2年次の指導計画では、表1のように1枚の指導計画の中に幼児の活動や教師の援助を入れることにより、幼児同士の関わりに視点を当てるようにした。

表1 「お気に入りの帽子をつくろう」の指導計画 9月19日

環境の構成	予想される幼児の活動	教師の援助
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 幼児の顔を見て話ができるように輪になって座る。</li> <li>○ 幼児が考えてつくれるような時間や場を設ける。</li> <li>○ 材料がぱっと見て分かり、取り出しやすいように置いておく。</li> <li>○ 材料を置く場所、つくる場所、接着の道具を置いておく場所など、それぞれのコーナーに分けておく。</li> <li>○ 床にゴミや紙が散らからないように、片付けながらつくる習慣が身につくように声を掛ける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 帽子づくりで使う材料を見たり、話を聞いたりする。               <ul style="list-style-type: none"> <li>・意見を出し合いつくりたい帽子をイメージする。</li> </ul> </li> <li>○ 自分だけのお気に入りの帽子をつくる。               <ul style="list-style-type: none"> <li>・ハサミ、のり、画板を持ってくる。</li> <li>・使いたい材料を選んで、幼児なりのこだわりをもって試行錯誤してつくる。</li> <li>・できたことを教師や友達に伝える。</li> </ul> </li> <li>◆ 様々な接着方法を知り、試そうとする。</li> <li>■ つくっている途中でアイデアを思い付き、取り入れながらつくる。</li> <li>■ 紙の触感や厚みの違いに気付き接着方法を工夫しながらつくる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>☆ 切り替えが難しい姿が見られたときは様子を見ながら、個別に声を掛けていく。</li> <li>○ 幼児が作りたい帽子のイメージがもてるように、どんな帽子があったらいいか、思いを聞いて共感したり、驚いたりする。</li> <li>○ 幼児の工夫に共感したり、驚いたりしながら幼児のつくる意欲や自信に変えていけるように声を掛ける。</li> <li>◆ 接着方法に困っている幼児には、紙の質感や厚みに合わせた接着方法を一緒に考え、道具の使い方を丁寧に知らせていく。</li> <li>◆ 幼児と一緒に帽子づくりをし、立体にしていく面白さに気付けるような工夫の仕方を示したり、一緒に楽しさを味わったりしていく。</li> <li>■ 友達とアイデアを共有したり、イメージを広げて帽子をつくったりする幼児の工夫を認めていく。</li> <li>■ 紙の質感や厚みの違いから、紙の特性や接着方法が変わることに気付けるように声を掛ける。 保護者の方に見てもらおうようマイク当番で声を掛ける。</li> </ul>

■…5歳児
◆…4歳児
☆…支援児
○…4.5歳児共通

② 幼児の育ちをドキュメンテーションを基に様々な人と共有

(ア) 写真を見ながら、幼児の思いや気づきを幼児自身が書き加えたり、楽しい思いを絵に描き表したりして、幼児と共に作成していった。

9月 4、5歳児合同での遊びのドキュメンテーションを5歳児がつくり、園内に掲示する。



「色々なえのぐ遊び」(※4)

(イ) 教師が作成したドキュメンテーションも掲示することで、保護者だけでなく地域の方にも見ていただき、幼児の育ちや成長の過程を伝えられるようになっていった。

6月 5歳児のダンボールハウスづくりのドキュメンテーションを教師がつくり、園内や小学校に掲示する。



「友達とつくるって楽しいね」(※5)

③ 実践記録で成長の過程を考察

5歳児 大型積み木遊びからダンボールハウスづくりへ

5月16日～6月10日

大型積み木遊び  
(共に同じ遊び)



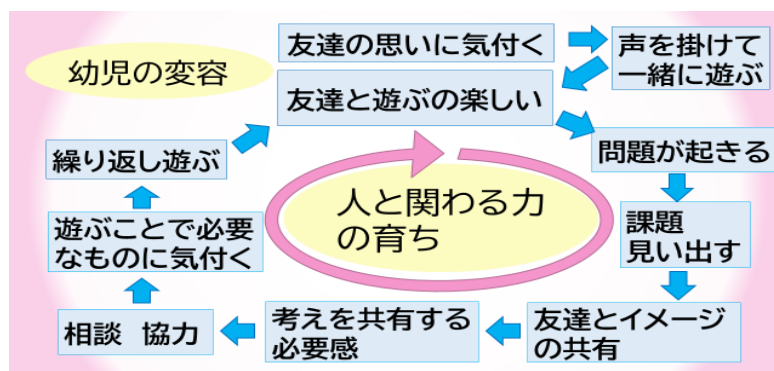
ダンボールハウスづくり  
(協力して同じ遊び)



相手の思いに気づき、どのように話をしたら相手に伝わるのか。どのようにしたらお互いが納得できるのかをみんなで考え話し合う。

イメージを共有し合い、相談したり協力したりすることで、友達とつくる楽しさを感じる。

友達と遊ぶことで必要なものに気づき、自分から進んで遊ぶ姿へと変わる。友達との関わりが深まり自分の思いを発揮する。



失敗や間違ふことが嫌で、自分の意見を言うのが苦手な幼児が多かった。友達と関わりながらの遊びや環境を設定したことで、友達と協力して遊ぶ姿に変わっていった。“失敗って何?”をテーマにした話し合いでは、“失敗しないと上手くはならない”“失敗は大事”という意見が出た。また、自分の苦手を発表し、苦手はみんなにあるんだと、お互いを認め合う姿も見られた。幼児は、自分らしさを少しずつ出し、自分達で生活を進めていこうとする姿に変わっていった。

④姫路市立幼稚園自主研究会開催（神戸常盤大学 多田琴子客員教授を招聘）  
公開保育、実践発表、グループワーク、講演 10月25日

## （４）２年次の成果と課題

### ①成果

- ・学級の保育を大切にしながら、異年齢児との合同保育を積極的に行い、異年齢の幼児同士が刺激し合うことで、幼児の自己表現の幅が広がった。（※６）
- ・実践事例の中で、幼児の育ちを読み取り、適切な援助は何かを考え、実行できるようになった。（※７）

### ②課題

- ・３年次は４歳の入園児が２名、５歳が３名である。さらに初めての異年齢混合学級であることから、取組の積み上げが難しい状況にある。このことから、幼小交流と共に幼児自身が他者に伝わるような言葉で伝えていける環境づくりに努めた。
- ・小規模園であるため、園内での保育観向上には、限りがある。そこで、２年次に続き、グループワークを通じた研修を企画し、保育力の向上を図る必要がある。

## （５）３年次(令和７年度)の取組

### ①自己表現の場を構成

(ア)混合学級において園生活の場を共にすることにより、相互関係に必然が起き、５歳児が４歳児には、言葉だけでなく身振り手振りを交えることでより伝わりやすくなることに気付いた。



「火災時の避難方法の伝達」

(イ)下記に示す幼小交流①②③の実践では、自分の思いや考えを相手に伝えようとする姿が見られた。相手がいかに聞いてくれているという安心感をもつと、幼児も緊張することなく、自分の言葉で伝えていた。



㉑「校長先生への自己紹介」



㉒「学校司書の先生の  
絵本読み聞かせ」



㉓「なかよし班活動での  
遊びの相談」

(ウ)ア、イの体験を重ねる中で、学級内でも対話する活動を増やした。このことで、相手に分かるように伝えようと自分の発する言葉を意識する姿が見られるようになった。また、伝わらない時は言葉を言い換えようとする姿も見られるようになった。

②他園を巻き込んだ研修会の開催 (神戸常盤大学 多田琴子客員教授を招聘)

8月6日

- ・「保育者としての自分を知るために」をテーマに3つの幼児観、教材観、指導観の視点から見た自分の保育の振り返りや付箋を使って自己の振り返りを行った。



「視点から見た保育の振り返り」



「付箋を使った自己の振り返り」



- ・グループワークを行うことで、他の教師の幼児観・教材観・指導観を聞き、自分とは異なる考え方に気づき、自己啓発につながった。

③自分の思いや考えを言語化

(ア) P4Cの方法を用いた対話では、「どうしてそれが好きなの？」という答えのない問いに対して、考えたり話したり友達の話の話を聞いたりする場を設けた「分からないな」「難しい」と言いながらも、自分で考え、自分の言葉で思いを語るという貴重な経験をすることが出来た。

(イ) クリスマス音楽会というテーマでの対話では、「楽しくしたい」「お家の人に見てもらいたい」等、活発に意見が出て、話し合うことの楽しさを実感できた。



「クリスマス音楽会の話し合い」

## 4 研究の成果と課題

### (1) 成果

#### ① 教師の援助と幼児の育ち

- ・ 教師が幼児一人一人に丁寧に関わり、幼児の思いや言葉をしっかり受け止め共感することで、自分の思いを伝えたり、友達の思いに気付いたりすることができた。また、幼児同士や学級での話し合いをする機会を多くもつことで、自分の思いも友達の思いも大切にし合える関係が育ってきた。
- ・ 幼児が少人数だからこそ、教師間で一人一人の幼児の姿について十分話し合い、共通理解することができた。また、教師それぞれが自分の行った援助について振り返り、意見交換をした。一人の幼児に対して多角的に援助を行うことで、適切な援助について考察することができた。

#### ② 多様な体験と人との関わり

- ・ 老人クラブとのふれあい遊び、地域の方からお聞きする野鳥や植物、震災の話、小学生とのなかよし班活動等、園内では体験できない様々な活動があった。



「老人クラブと玉入れ」



「野鳥の話」



「震災の話」



「仲よし班活動（はないちもんめ）」

それらの活動を通して、多くの人々と関わり、親しみや尊敬、憧れ等の気持ちを持ち、人と関わる喜びや楽しさを感じられるようになった。自ら関わろうとする姿に変わっていった。

#### ③ 教師の援助力の向上

- ・ 教師自身が自己課題を明確にし、その自己課題を職員間で共有することにより、

それぞれの自己課題の解決に向けての話し合いをもつことができた。また、幼児一人一人の良さと課題を見付け、具体的にどのような援助が幼児の育ちに繋がるのかを省察し実践することで、教師の援助力の向上が見られた。

- ・ 幼児の人数の減少により、1年次は学級ごとの保育、2年次は学級ごとの保育と合同保育、3年次は混合保育と3年間で保育の形態が変化していった。しかし、3年間同じ教師が担任をしたことで、研究テーマに沿った保育も継続して行うことができた。また、自園と同規模の公立幼稚園が増加している中、他園の教師を巻き込んで研修会を催し小規模園における研修の在り方を提示できた。

## (2) 課題

- ① 幼児の初体験やわくわく感、新しい知識を得る嬉しさや驚きを感じられるようにモデルとなる教師自身が様々なことに興味・関心をもち、多様な体験を求めて、引き続き保育内容の省察や体験活動の検討をしていきたい。
- ② 幼児も教師も少ないため関わりをもつ人が限られ、日々の生活の中では人との交流の幅に限界がある。そのため、小学校との交流の場を増やし、校長先生を始め様々な先生方や児童との関わりがもてるようにした。小学校の教師に幼児の姿や幼稚園の教師の関わりや援助を公開した。これらは小学校の協力なしでは、得られない取組である。これからも、フットワークを軽くして、多様な体験を求め、幼児も教師も人との関わりをさらに深めていきたい。

## 5 参考文献・引用文献

### (1) 参考文献

- 『幼稚園教育要領』 文部科学省  
『幼稚園教育要領解説』 文部科学省（フレーベル館）  
『幼児教育じほう』 令和4年度6月号 令和5年度8月号12月号  
令和6年度8月号  
『“体験”が感性を育む造形あそび』 深谷ベルタ 著（風鳴舎）  
『ことばえらびえほん ふわふわとちくちく』 齋藤孝 監修（日本図書センター）  
『ずかん・かがく絵本から広がる遊びの世界』 仲本美央 編著（風鳴舎）

### (2) 引用文献

- (※1) 1年次報告 p.4 実践事例 I 多様な体験 1.自分らしさの発揮  
(※2) 1年次報告 p.7 実践事例 II 関わりを通して育つ姿 1.(2)  
(※3) 1年次報告 p.9 実践事例 II 関わりを通して育つ姿 2.(2)  
(※4) ドキュメンテーション 9月 掲示 園内資料  
(※5) ドキュメンテーション 6月 掲示 園内資料  
(※6) 自主研究会冊子 表紙の写真(右上、左下)  
(※7) 自主研究会冊子 p.14~15 実践事例4 ダンボールハウスをつくろう